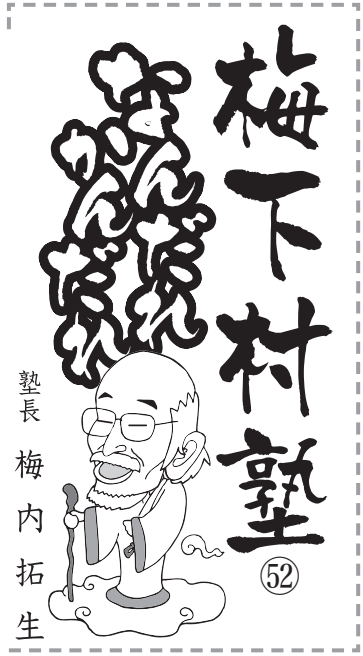
「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～



（水と空と松原）

〝水と空との連なれる
高田の海の八重の潮
轟と響く松原に
ハマナスの花ほの赤し〟

岩手県立高田高校の校歌の抜粋である。

7月21日の東海新報の第1面に3・11の大津波から生き残った「奇跡の一本松」の記事が掲載されている。第8面の啄木がみた三陸の海「旅の跡」たどる　石川啄木　没後100年　シリーズ(13)の最終記事には青々とした海と緑の松原と後ろに横たわる、うす紫色の永上山の写真がある。今日から大船渡で没後100年特別展という見出しも載っている。

旧制盛岡中学時代に先生と学友たちと一緒に気仙郡を旅行（修学旅行）した啄木を偲んでいろいろな記事の掲載がなされ、行事が計画されている。気仙地方の石川啄木記念行事への強い思いは、7月18日の石川啄木没後100年のシリーズ(12)の「昭和41年と言えば啄木生誕80年の年。各地でさまざまな記念事業が行われ、高田松原にも啄木碑が建立されている。

「文化不毛の地」と言われた大船渡に啄木碑が建立されるまでには、当時の気仙ペンクラブ（会長・金野菊三郎市教育長）による文学碑建設への熱意があった」と述べられている。

詩人の足跡が地域文化に及ぼす影響の大きさに驚きを感じるが、高田高校校歌は石川啄木の詩の情緒とは違い、伸び伸びとした世界に響きあう情緒が感じられる。気仙地方は「文化不毛の地」という劣等感を3・11の津波に流して、世界と手をつなぐ文化の芽が既に育ち始めていることに気付かねばならないと思う。

（急がばまわれ）

潮騒を　遠くに聞いて
茜雲（詠み人しらず）

今や世界は電子情報時代、オリンピック競技の結果も瞬時に世界各国に伝えられている。7月18日の「世迷言」はこの電子情報時代の情報の独占と選択の問題を述べている。今まで新聞はメディアの主流であったが、電子情報時代では、新聞が果たすべき役割を見出さねばならないと述べている。

「速報命」としては大新聞のみならず、地方の小新聞は勝負をやれない。そこで、地方の小新聞は電子情報の「速報命」ではなく、これを事が生じている場とそれを受け取る地方の人々の生活感情や文化価値意識と結び付けて、新しい価値を付け加えて伝えることを目指さなければならないと述べている。まさに、コラム「梅下村塾」はこのために生まれてきたものと言える。

（太っ腹と胆力）

情と理を呑んで治める
太っ腹（詠み人しらず）

7月20日の「世迷言」はITネット時代のいろいろな問題を述べている。〝文通〟から〝線通〟によるコミュニケーションの齟齬である。ITネット〝線通〟で大金を詐欺された例が後を絶たないと述べている。

メールを見たら泥棒とおもえ？〝便利の陰に大変ややこしく、不安が潜んでいる時代である〟復興への取り組みで多くの問題を抱えている被災地でも、これに似たような事件が報告されている。

7月18日の第4面の「広域トピックス　地域紙ネットワーク」には陸前高田市長の意見が載せられている。「戸羽市長が学生らと意見交換　安心・安全フォーラム　復興の妨げは国の規制」と戸羽市長は述べている。

現政権の震災復興への取り組みは、その実効性やスピードなどいろいろ指摘されている。政府の確固とした実効性のある基本計画と行動計画が構築されていないのである。政治的リーダーの不在である。

関東大震災時に東京の復興の大事業を行った後藤新平は岩手県生まれであるが、彼の太っ腹と胆力の大きさに関する逸話はたくさんある。

後藤新平は台湾の統治、満鉄総裁、拓殖大学学長、ソ連外交など大きな国家事業に従事したが、政治の理論化と社会の情も取り入れた倫理による統治を目指したと言われている。小沢一郎氏は後藤新平と同じ奥州市（水沢）生まれであるが、震災復興への政治家としての行動には、納得しがたいものがある。

まずは、小沢氏に身を清めて、東日本大震災復興に全力を注いでくれることを願うが、遅きに失うことになるのだろうか。